

乳幼児期のテレビ接触時間と 子どもの発達・育児状況に関する研究

神田直子 山本理絵

I. 問題と目的

テレビがほとんどの家庭に普及し生後まもなくからテレビとともに生活する世代が、親となってから久しい。テレビが子どもの発達に対して与える影響については、これまで様々な研究がなされてきた。テレビがもたらすプラス面として、たとえば特に不利な家庭環境にある子どもたちにとっては、言語発達を促進するなど、教育的に有効なメディアであるという指摘がある一方で、攻撃的行為や問題のある態度をモデリングしてしまうというマイナス面を指摘する研究などもあった(Huston & Wright, 1998)。また、2003年第3回日本赤ちゃん学会では、「メディアと子どもの生活」というシンポジウムが設定され、その中で坂元は、テレビの持つ、子どもの社会的適応・認知能力・視力・体力などへの影響についてのこれまでの研究動向をふまえた上で、「最近はかつてなかった長時間、長期間の接触が乳幼児期で強くみられたという問題点がある(坂元2003)」と指摘し、発達初期からのテレビへの長時間接触の研究の必要性を指摘している。

そのような中、最近になって、日本の主に小児医学の分野で、乳児を対象とした実証的なデータに基づいて、テレビの長時間接触と子どもの発達との関連を指摘する研究が、あいついで発表されるようになった。まず、開業医を構成メンバーの中心とする日本小児科医会が、会員からの事例報告により、2歳以下の子どもが長時間テレビをみることは、言葉や心の発達に悪影響を及ぼすとして、2歳までのテレビ・ビデオ視聴は控えるようにと警告を発した(日本小児科医会「子どもとメディア」対策委員会、2004)。さらに日本小児科学会は、1歳半児1900名のデータをもとに、「子どもの近くでテレビが8時間以上についている家庭(長時間視聴家庭)の子どもで有意語出現の遅れの率が高かった」とい

うことを見出し、乳幼児のテレビ・ビデオ長時間接触が、子どもの言葉の発達に悪影響があると結論づけ、特に2歳以下の子どもにテレビを長時間視聴させないように提言している。

しかし、これらの研究においては、「乳幼児のテレビ接触（視聴）」ということが、言葉遅れに影響する主要な要因として独立して取り上げられているが、テレビ接触の問題は、乳幼児とその親（研究対象は主に家庭で育てられている乳幼児であるので、「親」とはほぼ「母親」をさす）をとりまく様々な条件と関連させながら見ていく必要があるのではないだろうか。幼い子どもの場合、子どものいる空間は同時に親のいる空間であり、親のテレビへのかかわり方が子どものそれと直結する。テレビをつけるかどうかについても、多くは親に決定権がある。2～6歳の幼児のテレビ視聴時間の長さは、親のテレビ視聴時間の長さとの強い関係がある（白石、2001）。また、長時間視聴幼児の親は、「テレビがついていないとさみしい」と感じる傾向が高く、メディアへの嗜好性や依存性が高い傾向がみられたという（土谷、2000）。親の育児上、また育児をしている生活上のストレスや不安（育児ストレス、育児不安）と、テレビ視聴の問題は何らかの関係があると推測できる。

さらに、24時間の生活の中で、親子が他の様々な日常生活活動（外遊びや外出、家の中での遊びなど）をどのように、どの程度展開しているのか、地域の他の親とどのようなつながりをもっているのか、子育て支援などのネットワークにどの程度かかわっているのかなどによっても、その子どもや親にとってのテレビの役割や生活の中で占める割合は異なってくるのではないだろうか。すなわち、テレビの長時間接触・視聴の問題を、親子の生活の諸条件との関連でとらえる必要があり、それをもとに、実効性のあるテレビとの関わり方への提言や支援ができるのではないだろうか。

また、テレビ視聴に関するこれまでの研究では、テレビの子どもの発達に対する影響については、ある年齢でのテレビ視聴の量とその時の発達レベルの測定を関連させることにより、検討していた。しかし、このようなテレビと接しているその同じ時期における影響だけでなく、その後の時期の長期間にわたる影響についても縦断的に検討する必要があるのではないだろうか。

以上のことから、本研究では、次のような点について明らかにすることを目的とする。

- 1) 1歳の時点でテレビ接触時間（注）が長い子どもの場合、3年後の時点で、接触時間の短い子どもと比べ、発達的な問題や遅れなどが生じているだろうか。
- 2) テレビ接触時間が長い子どもの場合、テレビだけではなく、他の生活経験や親の養育行動の面でも、接触時間が短い子どもと比べ、違いがあるだろうか。
- 3) テレビ接触時間が長い子どもの場合、その親の子育てを支える要因（地域や家庭内でのサポート）や、親の持つ育児不安なども、接触時間の短い子どもの親と比べ、違いがあるだろうか。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象と調査手続き

2001年調査（01年調査） 愛知県内12カ所の保健センターの健診受診者および保健所フォローアップグループ参加者の親2,519名を対象とした質問紙調査を行った（質問紙配布は保健センターに依頼、回収は回答者個別の郵送による）。回収数は1,457、回収率は57.8%であった。調査時期は、2001年2月。回答者は、母親が98.9%であり、30代62.7%、20代34.1%であった。

2004年調査（04年調査） 2001年調査の回答者のうち、継続調査協力に同意し、調査用紙を郵送可能であった人1,115人を対象に質問紙調査を行った。回収数は925、回収率は83.0%であった。調査時期は、2004年2月。

上記の回答者のうち、今回の分析対象とした質問項目にほぼ回答していること、回答者が母親であること、01年調査での子どもの年齢が1歳であること、04年調査回答者は01年調査と対照可能なことなどの条件に合致する回答者を選びだした。その結果、今回の研究の分析対象とした回答者は表1のようになる。なお、個々の質問項目に対しては、それぞれ若干の無回答者があったため、それぞれの回答者合計人数は質問項目や尺度によって異なる数値となっている。

表1 各調査・年齢別、回答者の人数、子どもの月齢

調査年	子どもの年齢	人数	平均月齢	(SD)
01年調査	1歳	643	18.39	(1.21)
04年調査	4歳	367	55.04	(1.32)

2. 調査内容と点数化の方法

(1) テレビ視聴の状況

テレビ接触時間は、「お子さんが起きているとき、テレビやビデオがついている時間（子どもが他のことをしていても、子どものいる部屋でテレビがついている時間も含める）」を尋ねた。04年調査のみの項目として、「平日のお子さんがテレビやビデオを見る時間（テレビ視聴時間）」、「テレビゲーム・ファミコンで遊ぶか」、「誰と一緒にテレビを見ているか」について尋ねた。

(2) 子どもの発達状況

04年調査のみの項目である。津守稲毛発達検査の4歳から6歳前後の各領域の質問項目および軽度発達障害の子どもが4歳～6歳児時期に特徴的に持つと指摘されている行動や問題点（石川，2002、根来，2004）を参考に、「発達状況」（表2）および「園適応」の項目を作成した。発達状況：11項目に渡り、それぞれの項目がどの程度できるかについて4択での答えに応じて1点から4点を配点した。点数が高いほど、発達が遅れていると親が答えていることを示す。11項目の合計点を「発達遅延総点」とする。園適応：幼稚園・保育園の先生から「園での生活を楽しめている」「身の回りのものの整理整頓が苦手」「友達とけんかをすることが多い」「教室にいなければならないときに、外に飛び出すことがある」「自分勝手な行動が多く、仲間はずれになりがちである」「落ち着きがなく、集中して物事にとりくめない」「年齢に比べて、幼い」と言われたことが、あるかないか尋ねた。専門機関の指摘：「保健センターや専門機関などから、お子さんの発達上での問題や遅れなど」について言われたことが、あるかないか尋ねた。

表2 発達状況に関する質問項目

1	友達とごっこ遊びができる
2	しりとりをして遊べる
3	片足をあげてケンケンができる
4	服の裏表・前後や靴の左右を間違えない
5	はさみで簡単な形を切り抜くことができる
6	スキップができる
7	遊びのルールを理解し、守ることができる
8	つま先立ちや片足立ちができる
9	順番が待てる
10	歩いたり走ったりの体の動きがぎこちない
11	発音が不明瞭だったり、どもることがある

(3)子どもの生活経験・親の養育行動

子どもの遊びや生活の状況・家庭での養育行動についての項目である。外遊びについては、01年調査では「お子さんを連れて公園などに出る機会」、04年調査では「家の外の遊び場や友達の家などに行く機会」がどの程度あるかについて質問した。04年調査では、家庭での絵本の読み聞かせの頻度も質問した。

(4)地域サポート

親の地域でのつながりや支援機関による事業への参加についての項目。「子連れで遊びに行ける家」「子育てについての悩みを相談できる身近な人」「子育て支援センターや児童館、公民館などの子育て支援機関の事業に参加したこと」があるかないかについて尋ねた。

(5)親の育児不安

牧野(1982)、諏訪ら(1998)の育児不安に関する先行研究を参考に、質問項目を列挙した上で、「育児満足感が持てないこと」「育児への自信のなさ」「育児生活期ストレス」などをカバーできる項目を10個選び、親の育児不安に関する質問項目(表3)を作成した。それぞれの項目がどの程度あてはまるかについ

て4択での答えに応じて1点から4点を配点した。点数が高いほど育児不安が高いことを示す。10項目の合計点を「育児不安総点」とする。

表3 育児不安に関する質問項目

-
- 1 子どもを育てるのは楽しい。☆
 - 2 自分ひとりで子どもを育てているのだという圧迫感を感じる。
 - 3 子どもがわずらわしくてイライラしてしまう。
 - 4 子どもをつい叩いてしまうことがある。
 - 5 子どものことで、どうしたらよいか分からなくなることがある。
 - 6 自分は、育児に向いていると思う。☆
 - 7 自分は子どもをうまく育てていると思う。☆
 - 8 育児によって、自分が成長していると感じられる。☆
 - 9 子どもから離れて、外出するのは心配でしかたがない。
 - 10 一日が充実して、ハツラツとしている。☆
-

☆は逆転項目

Ⅲ. 結果

1. テレビ接触時間と、子どもの発達との関連

(1)各年齢におけるテレビ接触時間とテレビ視聴時間

01, 04年調査でのテレビ接触時間を、年齢別に見たものが表4である。1歳より4歳のほうが、テレビ接触時間は少ない。4歳では未就園児は就園児に比べ、テレビ接触時間がはるかに長い。また、その生活空間や時間的条件が、多数を占める就園児とかなり異なると思われるので、本論文での以降の分析では、4歳児では就園児のみを対象とする。テレビ視聴時間（04調査のみ）の結果は、表5の通りである。

テレビ接触時間長群 それぞれの年齢・就園状況において、テレビ接触時間の平均を出し、「平均値+標準偏差」以上のテレビ接触時間があった子どもを「テレビ接触時間長群」とした。1歳児では1日約9時間以上、園に通っている4歳児でも5時間半以上、自分のいる部屋にテレビがついている子どもたちのグループである。また同様の手続きで、「視聴時間長群」を作成した。

表4 テレビ接触平均時間とテレビ接触時間長群

調査年	年齢	人数	平均値 (時間)	(SD)	長群	長群の人数 (%)
01年調査	1歳 全体	634	5.94	(2.99)	8.93以上	123(19.4)
	4歳 全体	362	4.07	(2.21)	6.28以上	
04年調査	うち就園	318	3.76	(1.79)	5.55以上	43(13.5)
	うち未就園	44	6.33	(3.40)		

表5 テレビ視聴時間とテレビ視聴時間長群

調査年	年齢	人数	平均値 (時間)	(SD)	長群	長群の人数 (%)
04年調査	4歳 全体	358	2.30	(1.25)		
	うち就園	317	2.17	(1.11)	3.2以上	38(12.0)
	うち未就園	41	3.32	(1.78)		

04年のテレビ接触時間とテレビ視聴時間の間には比較的強い相関がある。テレビがついている時間が長い家庭の子どもはテレビ視聴時間も長い。また、01年調査と04年調査での間の相関も比較的強い(表6)。テレビがついている時間の長さには、3年の間にある程度の一貫性があり、またテレビがついている時間の長い家庭では、子どもがテレビを視聴する時間も長いといえる。

表6 テレビ接触時間・視聴時間の相関

年齢	テレビ接触時間(04年)	視聴時間(04年)
1歳	テレビ接触時間(01年)	0.471***
4歳	テレビ接触時間(04年)	0.631***

(ピアソンの相関係数 *** $p < .001$)

(2)01年調査(1歳児)時点でのテレビ接触時間長群の、3年後の発達状況、園適応

01年時点でのテレビ接触の程度と3年後の発達との関連を検討するため、01年調査におけるテレビ接触時間長群(「01年テレビ接触時間長群」とする)と一般群とを、04年時点での発達に関連する諸要因について比較してみよう。

01年テレビ接触時間長群は123人であったが、そのうち04年調査にも継続して回答したのは、59人（4歳児回答者全体のうちの18.6%）であった。

01年テレビ接触時間長群は、3年後（4歳児）に「専門機関などからの発達の遅れ指摘あり」が15.3%であり、一般群の6.7%に比べ有意に多かった。また、園適応についても同様の結果で、01年テレビ接触時間長群は、3年後に、園の保育者から「教室から飛び出す」「自分勝手に仲間はずれ」という指摘があった子が、それぞれ13.6%、5.1%であり、一般群に比べ有意に多かった（表7）。

発達状況について質問した11項目の総合得点である発達遅総点に関しても同様に、01年テレビ接触時間長群は一般群よりも発達遅総点が有意に高かった。発達状況の項目の中では「友達とごっこ遊び」「しりとり」「遊びのルール理解」などの遅得点が高かった（表8）。

表7 01年調査でのテレビ接触時間群別 3年後の発達・園適応の問題

年齢	01年でのテレビ接触時間群	なし	あり	合計	χ^2 検定
	専門機関からの発達問題の指摘	一般群 N=253 93.3%	6.7%	100.0%	$\chi^2(1)=4.562^*$
	長群 N=59 84.7%	15.3%	100.0%		
4歳	教室から飛び出す	一般群 N=257 94.9%	5.1%	100.0%	$\chi^2(1)=5.589^*$
	長群 N=59 86.4%	13.6%	100.0%		
	自分勝手に仲間はずれ	一般群 N=255 98.8%	1.2%	100.0%	$\chi^2(1)=3.905^*$
	長群 N=59 94.9%	5.1%	100.0%		

(*p<.05)

表8 01調査テレビ接触時間群別 04調査での発達遅点

年齢	テレビ接触時間一般群			テレビ時間長群			t値		
	人数	平均値	(SD)	人数	平均値	(SD)			
4歳	発達遅総点	245	16.04	(4.08)	<	59	18.32	(4.67)	t (302)=3.75 ***
	友とごっこ遊び	252	1.31	(0.53)	<	59	1.56	(0.68)	t (309)=2.69 **
	しりとりができる	252	1.82	(0.97)	<	59	2.46	(1.06)	t (309)=4.51 ***
	遊びルール理解	251	1.72	(0.68)	<	59	1.93	(0.69)	t (308)=2.13 *

(t検定 *p<.05, **p<.01, ***p<.001)

2. テレビ接触時間と子どもの生活経験・親の養育行動（外遊び、絵本読み、マルチリトメント）との関連

(1) テレビをめぐる生活状況

幼児のいる家庭では、どのようなテレビ等の見方をしているのだろうか。01年調査では質問しなかったが、04年調査ではテレビ視聴のルールやテレビゲームをするかどうかについて質問した。04年調査のテレビがついている時間や視聴している時間と、テレビ視聴のルール、テレビゲームとの関連をみてみよう。

① テレビゲーム

04年調査によると、テレビゲームで遊んでいる子どもは24%（男児の35%、女児の12%）である。04年のテレビ接触時間との関係を見てみると、テレビがついている時間が長い群には、ゲームをしている子どもが一般群に比べ有意に多かった（ $\chi^2(1)=8.855$ $p<.01$ 図1）。テレビ視聴時間長群・一般群別でも、同様の傾向があった（ $\chi^2(1)=3.869$ $p<.05$ 図1）。

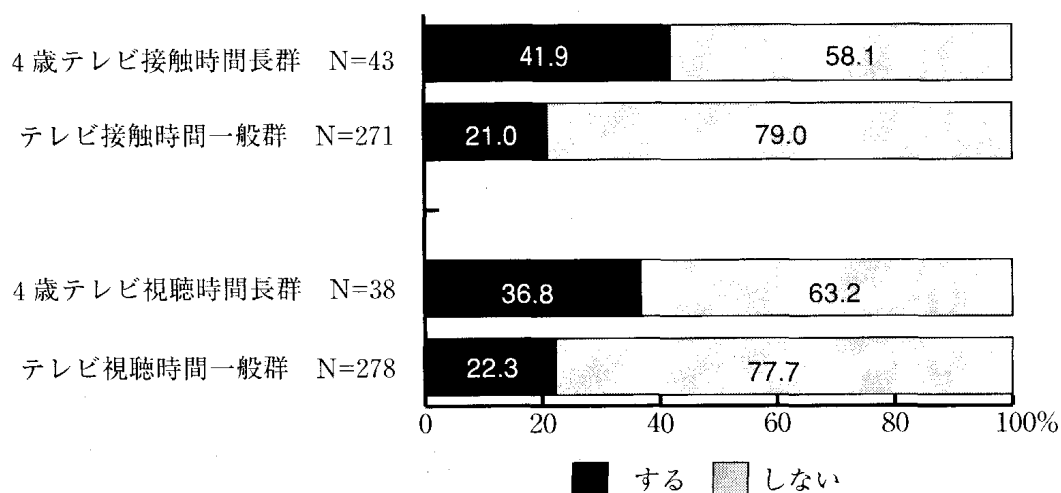


図1 テレビゲームで遊ぶか（テレビ接触時間・視聴時間群別）

② だれと一緒にテレビ・ビデオを見ているか

誰と一緒にテレビなどを見ることが多いかについては、4歳全体の50%が大人と一緒に見ている。テレビ接触時間及びテレビ視聴時間の群別にみてみると、図2のように、長群は、子どもだけで見せているというより、大人と一緒にみている人が6, 7割と多く、テレビ接触時間長群は一般群との有意差がみ

られた($\chi^2(2) = 6.903$ $p < .05$)。視聴時間長群は3.2時間以上視聴している群であり、おとなの視聴時間も長くなっている群だといえる。

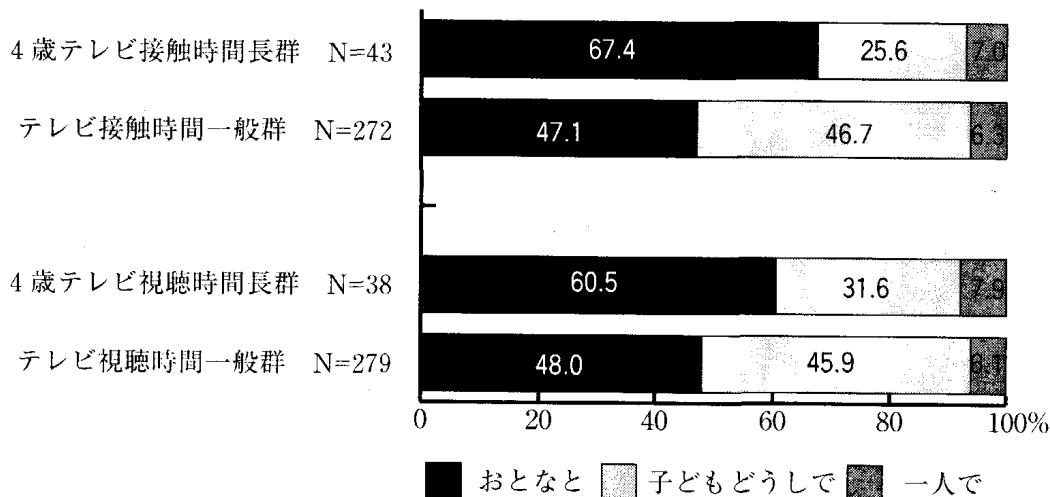


図2 だれとテレビを見ているか（テレビ接触時間・視聴時間群別）

(2) 絵本の読み聞かせ

家庭での絵本の読み聞かせの頻度についても、04調査で質問項目を追加した。4歳では、テレビをつけている時間が長い群は、一般群より絵本の読み聞かせの頻度が有意に少なくなっている ($\chi^2(3) = 10.142$ $p < .05$ 図3)。テレビ視聴時間長群においても、同様の傾向がみられた ($\chi^2(3) = 17.696$ $p < .01$ 図3)。

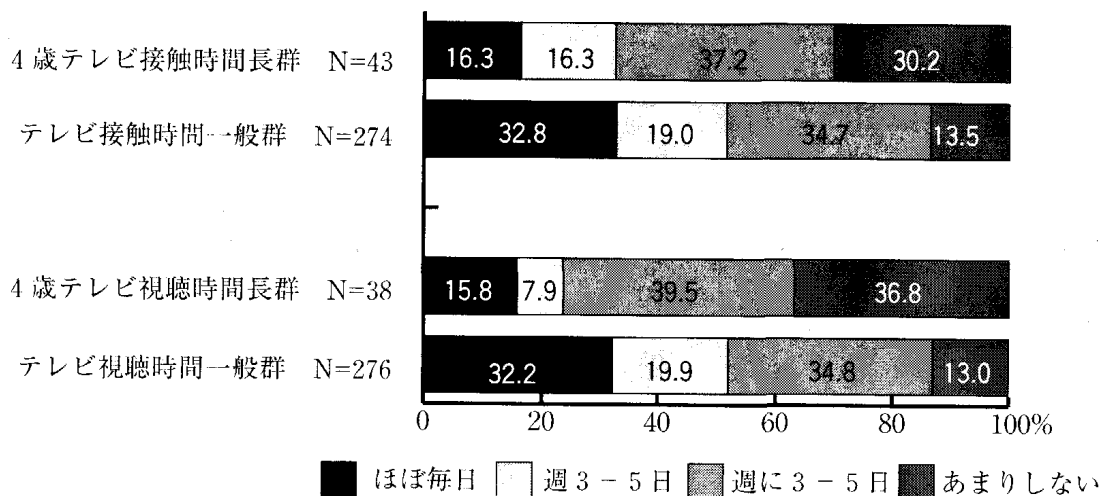


図3 絵本の読み聞かせの頻度（テレビ接触時間・視聴時間群別）

(3) 家の外での遊び

子どもが家の外で遊ぶことはどの程度あるのだろうか。01年調査では「お子さんを連れて公園などに出る機会」、04年調査では「家の外の遊び場や友達の家などに行く機会」について質問した。その回答をテレビ接触時間の長短との関係でみてみた。公園などに出る機会は、図4のように、1歳では、テレビ接触時間長群の方が一般群より有意に少なかったが ($\chi^2(3) = 8.685$ $p < .05$)、4歳では、有意差がみられなかった。

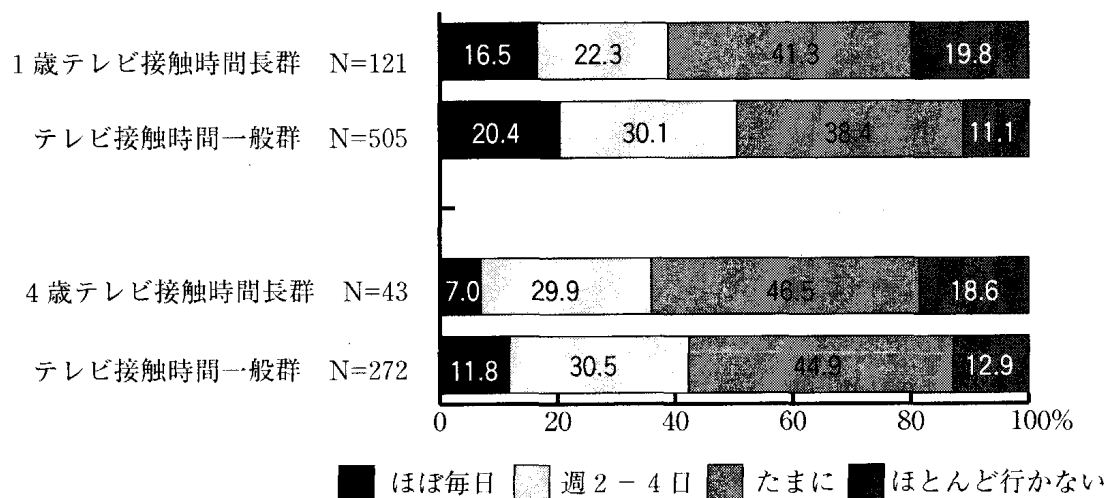


図4 公園や友だちの家などへ遊びに行く機会（テレビ接触時間群別）

3. テレビ接触時間と親の地域サポート・育児不安との関連

(1) テレビ接触時間と地域でのつながり

テレビ接触時間と周りの子育てサポートとの関連をみてみよう。図5のように、1歳児で、テレビ接触時間長群の方が一般群に比べて、子どもを預かりあう家が「ない」の割合がどちらかというが多かったが有意な差は見られなかった。「子連れで遊びに行ける家」の有無及び「子育てについての悩みを相談できる身近な人」の有無についてはテレビ接触時間長群と一般群を比べるといずれの年齢でも有意差はなかった。テレビをつけている時間が長い家庭では、「預かりあう」など、一歩踏み込んだ深いつながりが薄い傾向がある。

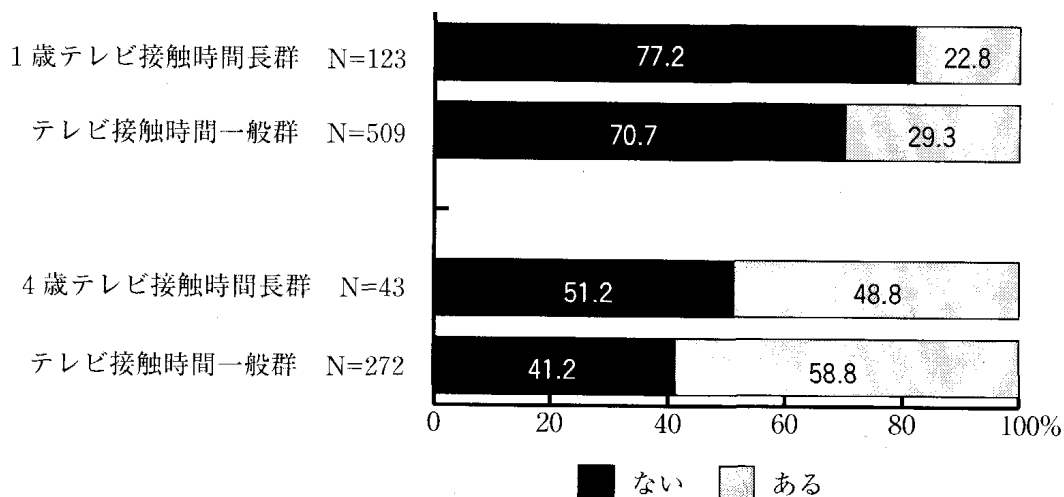


図5 子どもを預かりあう家があるか（テレビ接触時間群別）

(2) テレビ接触時間と支援事業参加

子育て支援センターや児童館、公民館などの子育て支援機関の事業に参加したことがあるかどうかと、テレビ接触時間の関係を見たのが図6である。01年調査の1歳児と04年調査の4歳児の親では、テレビがついている時間が長い群の方が一般群に比べて、支援事業に参加したことがある親が有意に少なかった（1歳 $\chi^2(1) = .030$ $p < .05$, 4歳 $\chi^2(1) = 4.784$ $p < .05$ ）。テレビ視聴時間長群においても、4歳では同様の傾向があった（ $\chi^2(1) = 8.859$ $p < .01$ ）。

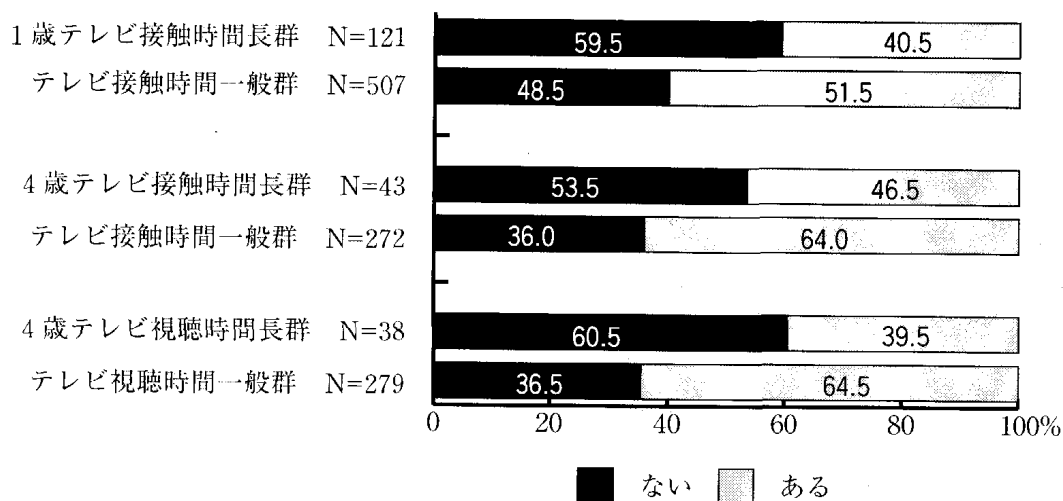


図6 子育て支援事業に参加したこと（テレビ接触時間・視聴時間群別）

(3) テレビ接触時間と親の育児不安

テレビ接触時間と育児不安の関係をみるために、テレビ接触時間の長群、一般群で、育児不安総点を比較してみた。01年調査および04年調査ともに、テレビ接触時間長群の方が、育児不安総点が有意に高かった(表9)。04年調査の視聴時間長群においても、育児不安総点が一般群より有意に高かった(表10)。長時間テレビをつけている家庭、長時間テレビを見ている子どもの親は、育児不安が高い傾向があるといえる。

表9 テレビ接触時間群別 育児不安総点

調査年	年齢	テレビ接触時間一般群			テレビ時間長群			t値	
		人数	平均値	(SD)	人数	平均値	(SD)		
01調査	1歳	495	22.71	(3.51)	<	121	23.52	(3.84)	t(614)=2.246 *
04調査	4歳	266	22.04	(3.99)	<	40	23.65	(4.00)	t(304)=2.381 *

(t検定 *p<.05)

表10 テレビ視聴時間群別 育児不安総点

調査年	年齢	テレビ接触時間一般群			テレビ時間長群			t値	
		人数	平均値	(SD)	人数	平均値	(SD)		
04調査	4歳	269	21.98	(4.04)	<	36	23.39	(3.28)	t(303)=2.006 *

(t検定 *p<.05)

IV. 考察

最近の乳幼児期のテレビ接触・視聴時間に関する、NHKが関与した調査によると、0歳(5ヶ月~11ヶ月)でテレビ・ビデオ接触時間(乳児がいる部屋でテレビがついている時間)が平均4時間弱(菅原、2003)、視聴時間は4歳児平均2時間35分、5~6歳児2時間32分、テレゲームをする子は4歳児23%、5~6歳児34%であった(白石、2001)。本研究ではテレビ接触時間の1歳児での平均が約6時間、視聴時間は4歳児が平均2.17時間であり、テレビゲームをする子は4歳児24%であった。本研究の対象児は、上記のデータと比べ、接触時間がやや長く、視聴時間がやや短い、大幅なズレはなく、テレビ接触・視聴に関しては大きな偏りはない対象者であると思われる。

まず、これらの子どもの中で、特にテレビ接触時間長群のテレビとの関わり方についてまとめてみよう。彼らは1歳児期では、一日9時間以上テレビがついた部屋にいる親子である。子どもが起きている時間のうちほとんどの時間テレビがつきっぱなしの状態の家庭である。3年後のデータによれば、テレビ接触時間とテレビ視聴時間は相関が高く、長時間テレビをつけている環境にある子どもたちは長い時間視聴している子どもたちでもあろう。またテレビ接触時間は3年の間で相関が高く、テレビ接触の習慣は比較的固定されている。

次に、テレビ接触時間長群の3年後の発達状況についてまとめてみよう。

テレビ接触時間長群の子どもでは、接触時間の短い子どもたちと比べると、4歳になった時点で主に言葉や友達との遊びなどを中心とした発達状況に遅れがあり、友達との遊びや園での生活適応の面で、問題を抱える比率が高かった。これは「親の調査回答を通して」という条件つきであるが、保健所などの発達健診の専門機関や、幼稚園・保育園の保育者という第三者からの指摘も含まれており、単なる親の主観的な心配ではない。これまで片岡（2002）が、「新しいタイプの言葉遅れの幼児」として、1歳くらいからテレビ・ビデオの過剰な接触により、言葉の発達が遅れ、幼児期において友達と上手に遊べないなどの症例を報告してきたが、その事例や、日本小児科学会こどもの生活改善委員会（2004）が指摘したものと同一の傾向が、本研究において縦断的にも見いだされたことになる。

しかし、これらの発達上の違いがテレビという要因によってのみもたらされたものであると考えるのは早計であろう。

ひとつには、1歳児の時点でテレビ接触時間長群であった子どもたちは、その時点でのテレビをつけている時間が長いだけでなく、他の生活経験にも違いがあったからである。1歳児期で接触時間長群では、1歳児期で公園など家の外で遊ぶ機会が少なかった。そのうち約20%は、公園などの外遊びに「ほとんど行かない」子どもたちである。この年齢はほとんどが就園前で、子どもが友達との遊びや戸外での活動ができるかどうかは、親が意識的に外に連れ出すかどうかにかかっている。テレビ接触時間長群は、そのような活動が保障されていない傾向がみられた。また、1歳児の接触時間長群では子育て支援事業に参

加したことがある人が少ない。

また、4歳児の時点で、接触時間長群及び視聴時間長群は、テレビゲームをしている子どもが多く、絵本の読み聞かせをしてもらう頻度が少なかった。その親は保育所や児童館などで催されている子育て支援事業に参加している人の比率も低い。このように、テレビ接触時間長群の子どもたちは1歳児期および4歳児期で、子どもの発達に必要なテレビ以外の多様な活動経験が少ない傾向がみられた。また1才でのテレビ接触時間と4才でのそれとは比較的強い相関があった。服部ら(2004)は、3歳から5歳児を持つ親466人に対する調査において、テレビ視聴時間が長い幼児は排泄、睡眠、食事などの規則性が低いことを見出している。子どものテレビ視聴が長い家庭では、生活習慣全般に対するリズムが確立していないことが伺われる。本研究ではさらに、友達との関わりなど社会性や言語の発達により直接的に関わると思われる活動や経験もまた、少ないということが見出された。「テレビを長時間つけている」という家庭の習慣はかなり持続し、またそれとその家庭で展開される生活や様々な活動体験、しつけなどは連動しているのである。

もうひとつの要因としては、親の側の人的ネットワークの乏しさや育児不安の高さということが上げられる。上記のようなテレビ接触時間長群の子どもたちの活動内容の特徴は同時に親の地域での親仲間、友人、支援機関などとの人的なつながりの薄さを意味している。また、テレビ接触時間長群及び視聴時間長群の親は、育児不安が高い傾向にあった。「育児の楽しさが感じられない」「育児に自信がない」「育児期の生活ストレス」を強く感じている人たちである。土谷(2001)は、乳児期から長時間テレビ・ビデオ視聴をさせていた母親にインタビューし、「父親の帰宅が遅く、…母親同士の付き合いも苦痛で、1日中子どもと向き合って疲れてしまう」という母親の声を紹介しながら、地域との関係が希薄な中、母親一人が過重な育児の負担を担っており、「もう一人の育児の担い手」をテレビという物に求めていると指摘している。本研究のデータによって、このような親の子育てを支える人的なネットワークが乏しいことおよび育児不安が高いことと、テレビを長時間つけていることが関連することが検証されたといえる。

服部ら（1991）は、子どもの発達状況と様々な育児行動との関連についての大規模な調査をおこなっているが、その結果「親の近所の話し相手が多い」こと、子どもを「よく外で遊ばせている」「育児不安が少ない」こと、「体罰」が少ないこと等は、「子どもの（良好な）発達と強い相関があった」としている。親のストレス状況、育児を支えるサポートリソースの得にくさ、子どもの生活体験とりわけ直接体験の狭さ、これらの諸側面が総合して子どもの発達に影響を与えているといえよう。

最初にふれたように、小児科学会を中心とした医師、医学者たちが「早期・長期のテレビ視聴の子どもの発達への危険性」を訴え、母子の直接的交流の必要性を強調したことは一定の根拠があり、貴重な提言である。

しかし、本研究の結果明らかになったように、子どもが乳児期から長時間テレビをつけっぱなしにしている家庭では、テレビの問題だけでなく、相互に関連しあった様々な問題を抱えている。育児不安が高く、親のネットワーク、子どもの仲間と遊ぶチャンスが乏しく、いわば「結果として」テレビをつけっぱなしで家で親子でひきこもっている状態になっているのである。テレビ視聴、テレビをつけていることのみを取り上げて、警告を発しても、場合によっては親の育児不安をさらにかきたてることになりかねない。親子ともに孤立した家庭から一歩踏み出して、相談相手や仲間作りができるような、生活状況全体にわたるアドバイスや実際的な子育て支援があってはじめて、結果としてテレビ視聴・接触を低減していくことができるのではないだろうか。

最後に、テレビ接触・視聴と言葉遅れ出現のメカニズムについては、本研究では解明することを目的とはしていないが、現在論争のさなかにある問題のようである。日本小児神経学会（2004）は、片岡（2002）らの論に対し、言葉の遅れがあたかもすべてメディアのせいのようにとらえている論評があるが、いまのところ十分な科学的根拠はないと批判している。過去に「テレビの見すぎが自閉症につながる」とした誤った説が、障害を持つ親子を苦しめた歴史もある。早期長期テレビ接触と子どもの能の発達に関する認知神経科学等の研究に期待したい。

*本研究は愛知県児童総合センター委託研究費（神田直子、平成12年度）および日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究c、平成14～16年度、代表 山本理絵）による調査データに基づいた研究である。

【文献】

- 服部祥子・原田正文（1991）．乳幼児の心身発達と環境，名古屋大学出版会．
- 服部伸一・足立正・嶋崎博嗣・三宅孝昭（2004）．テレビ視聴時間の長短が幼児の生活習慣に及ぼす影響．*小児保健研究*，63(5)，516-523．
- Huston, A. C. & Wright, J. C. (1998). Mass media and children's development. In Siegel, I. E. & Renninger, K. A. (Eds.), *Handbook of child psychology*. Fifth edition. 4, 999-1058. New York, NY : John Wiley & Sons, Inc.
- 石川道子（2002）．軽度発達障害児の発見と対応．*障害者問題研究*，30(2)，98-107．
- 片岡直樹（2002）．新しいタイプの言葉遅れの子どもたち．*日本小児科学会雑誌*，106(10)，1535-1539．
- 牧野カツ子（1982）．乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞．*家庭教育研究所紀要*，3，34-56．
- 根来あゆみ・山下光・竹田契一（2004）．軽度発達障害児の主観的育てにくさ感母親への質問紙調査による検討．*発達*，97，13-18．
- 日本小児科学会こどもの生活改善委員会（2004）．乳幼児のテレビ・ビデオ長時間視聴は危険です．*日本小児科学会雑誌*，108(4)，709-712．
- 日本小児科医会「子どもとメディア」対策委員会（2004）．「子どもとメディア」の問題に対する提言．<http://jpa.umin.jp/index.htm>（*日本小児科医会会報* 27号）．
- 日本小児神経学会（2004）．提言：「子どもに及ぼすメディアの影響」について．*脳と発達*，36，443．
- 坂元章（2003）．テレビ・テレビゲームが子どもの発達に及ぼす影響 第3回日本赤ちゃん学会 シンポジウム3 メディアと子どもの生活．*月刊地域保健*，34(7)，71-73．
- 白石信子（2001）．この10年で伸びた幼児のテレビ視聴時間 —2001年6月「幼児視聴率調査」から—．*放送研究と調査*，51(10)，74-81．
- 菅原ますみ（2003）．乳児期のメディア接触 第3回日本赤ちゃん学会 シンポジウム3 メディアと子どもの生活．*月刊地域保健*，34(7)，73-74．
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる（1998）．*母親の育児ストレスと保育サポート—子育て支援・環境づくりの指標*．川島書店．
- 土谷みち子（2000）．乳幼児のメディア生活の実態と臨床保育内容 —神奈川県未就園児の生活調査から—．*家庭教育研究所紀要*，21，88-100．

土谷みち子（2001）. 子どもとメディア —乳児期早期からのテレビ・ビデオ接触の問題点と臨床的保育活動の有効性—. *国立女性教育会館研究紀要*, 5, 35-46.

（注）

本研究では、「子どもがいる部屋の中でテレビ（ビデオも含む）をつけている時間」を「テレビ接触時間」とし、子どものテレビとの量的関わりを示す主要な変数とする。01年調査の対象は1歳児という乳児であり、持続的・意図的にテレビをみている「テレビ視聴時間」を親が回答することが困難であると判断したからである。また、「子どもはテレビを視聴しておらず他の活動をしているが、子どものいる部屋でテレビがついている状況」であっても、テレビの強い吸引力が、年少幼児の子どもの関心をしばしば奪うことの危険性はよく指摘されているためでもある。さらに、親の側の問題として、親の養育行動や育児不安などとの関連で、「子どものいる部屋で親がテレビをつけている時間」を問題としたいという目的もあったからである。

なお、04年調査では、子どもが4歳となったため、接触時間の他に「テレビ視聴時間」も尋ね、接触時間と視聴時間との関連も検討する。